

令和 6 年度地域のデザインリテラシー向上に向けた、
インタウンデザイナーと自治体等の地域活性化に取り組む主体をつなぐ
「ナレッジシェア・ポート(知識移転の場)創出」実証調査事業
報告書

令和7年3月
経済産業省 東北経済産業局
(委託事業者:合同会社運動)

目次

1.	はじめに	3
(1)	事業目的	3
(2)	事業内容及び実施方法	4
2.	ナレッジシェア・ポート(知識移転の場)の創出	5
(1)	東北各地のインタウンデザイナーの発掘・活動の可視化	5
①	令和6年度選定インタウンデザイナー(6名)	5
②	取材概要	8
③	取材結果	17
(2)	公開討論会の開催	19
①	開催概要	19
②	実証結果	22
3.	東北のインタウンデザイナーと地域の共創促進に向けたガイドブックの作成	27
4.	「ナレッジシェア・ポート(知識移転の場)創出」実証調査から見てきたもの	28

1. はじめに

(1) 事業目的

東北地域は、少子高齢化や若年層の首都圏等への流出により、全国に先駆けて人口減少が進んでおり、働き手や需要の減少、事業承継をはじめ多くの地域課題にいち早く向かい合っていると言える。こうした人口減少を起因とした地域課題が多様化・複雑化する中、地方自治体単独による課題対応が困難になっており、地域の持続的な発展に向けては、地域課題解決や地域活性化に資する専門人材との協働が不可欠である。

このような中、その専門人材の一つとして、地域課題の解決や地域の文化創造、地域の企業経営に貢献するなど広義のデザイン活動を行う地域に根ざしたデザイン人材(※1)として「インタウンデザイナー」の取組が注目されている。地域固有の資源を元に新たな価値を創出する、地域側が気付いていなかった魅力を発見し再編集して伝える、地域内外のステークホルダーを繋ぎ地域に関わる仲間を増やすなど、従来の視覚的デザインにとどまらない活動は、地域を活性化させ、地域に新たな経済循環を生み出している。

この点に着目し、経済産業省では令和 4 年度に、「インタウンデザイナー」と「自治体、商工会議所等の支援機関、地域商社、DMO、中小企業等(以下「自治体等」という。)の地域活性化に取り組む主体」との共創による地域課題解決の取組の促進に向け、「インタウンデザイナー活用ガイド」をまとめている。(※2)

しかしながら、我が国のデザイン人材の約 6 割は東京都及び大阪府に集中しており、東北地域で活動するデザイン人材が限られているということが現状である。そのため、東北経済産業局では、令和 5 年度に、東北で活躍するインタウンデザイナーの創出、可視化に向け、東北各地で活躍する 7 名のインタウンデザイナーの掘り起こし、繋がりがづくり、各地のインタウンデザイナーの取組における知見共有に取り組んできたところ。(※3)

令和 5 年度事業を踏まえ、令和 6 年度は、東北各地の「インタウンデザイナー」と「自治体等の地域活性化に取り組む主体」の共創による地域課題解決の取組を促進するため、自治体等の地域活性化に取り組む主体におけるインタウンデザイナーの取組に対する解像度を高め、相互理解を深めることで自治体等の地域活性化に取り組む主体のデザインリテラシーの向上を図る必要があることから、更なる東北各地のインタウンデザイナーの取組や知見の可視化に取り組む。

また、インタウンデザイナー及び自治体等の地域活性化に取り組む主体による相互の知見共有・触発の機会を実証的に創出し、どのような取組や知見の共有が有意義であるかなど共鳴する要素や参加者の気づきや変化を検証し、考察することで、共創環境の整備に向けた施策の検討を行う。

本事業を通じて、自治体等の地域活性化に取り組む主体におけるデザインリテラシーの向上を図ることで、東北地域のデザイン人材と自治体等の地域活性化に取り組む主体における共創の取組を促進し、地域の包摂的成長の実現を目指す。

※1:本事業におけるデザイン人材とは、グラフィックデザイナー等の視覚的表現を専門とする者に限らず、デザインリサーチャーやソーシャルデザイナー、編集者やライター、イラストレーター、写真家、建築家、プランナーやアートディレクターなど、デザインに関連する職能を有する者を広く含むものとする。

※2:「デザインがわかる、地域がかわる~インタウンデザイナー活用ガイド~」

https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/human-design/guide_IntownDesigner.pdf

※3: 東北地域のデザイン人材を繋ぐ「ナレッジシェア・ポート(知識移転の場)創出」実証調査事業

<https://www.tohoku.meti.go.jp/kikaku/chihososei/topics/240425.html>

(2) 事業内容及び実施方法

本事業は東北経済産業局と調整の上、東北各地のインタウンデザイナーの更なる掘り起こし(インタビュー)を行うとともに、東北地域のインタウンデザイナー及び自治体等の地域活性化に取り組む主体が集うナレッジシェア・ポート(知識移転の場)を実証的に創出し、双方向の意見交換を通じて考察をまとめ、事業目的の達成を図る。

具体的には、東北各地のインタウンデザイナーの更なる掘り起こし(インタビュー)及び「公開討論会」を実施し、それらを通して、インタウンデザイナーが取り組むアクションや、自治体等の地域活性化に取り組む主体との共創における障壁やポイントなどを共有する。その中でもインタウンデザイナー及び自治体等の地域活性化に取り組む主体にとって有意義な情報は何であるかなど、共鳴する要素や新たな気づきや意識の変化を抽出、考察し、「東北地域のインタウンデザイナーと自治体等の地域活性化に取り組む主体の共創促進に向けたガイドブック(仮)」としてまとめる。実施内容についての詳細は後述する。

2. ナレッジシェア・ポート(知識移転の場)の創出

(1) 東北各地のインタウンデザイナーの発掘・活動の可視化

東北各地で躍動するインタウンデザイナーを発掘し、インタウンデザイナーの取組に対する解像度を高めるため、各者が取り組んでいるアクションを可視化するとともに、自治体等の地域活性化に取り組む主体との共創を促進するため、共創における障壁や秘訣などについて、令和 5 年度事業で選定した 7 名のインタウンデザイナーとともに、取材を行う。

また各インタウンデザイナーが地域で関わっている自治体等の地域活性化に取り組む主体を訪問し、インタウンデザイナーとの共創の取組などについての取材を行う。

上記の取材を踏まえ、後述する「東北地域のインタウンデザイナーと自治体等の地域活性化に取り組む主体の共創促進に向けたガイドブック(仮)」への掲載に向け、記事化を行う。

① 令和 6 年度選定インタウンデザイナー(6 名)

青森県青森市

豊川 茅 氏

<https://www.instagram.com/toyokawachie/>



青森県青森市生まれ。高校時代に美術・デザインを学び、卒業後は洋裁を学ぶ。デザイン会社等の勤務を経て、2016 年から「トヨカワイラスト研究室」として活動・“なんとなくハッピー”をテーマに青森を拠点に県内外のイラスト・デザインを手がける。2023 年から“前向きじゃないものづくり”がテーマのユニット「つらいデザイン」をスタート

岩手県花巻市
鈴木 健一 氏

<https://www.suzuken.net/>



岩手県北上市生まれ。高校と大学で絵や美術を学び、東京へ。イラストと写真の学校へ通いながら、複数のアルバイトやボランティアを経て広告制作会社へ。2020年に岩手県花巻市へ家族と移住。地域の魅力を引き出すデザインを得意とし、広告、パッケージデザイン、ロゴ制作など多岐にわたる分野で活動。

宮城県仙台市
仙台青葉学院短期大学 講師 伊藤 典博 氏

<https://www.skystars.jp/>



静岡県三島市生まれ。日本大学大学院芸術学研究科博士前期課程修了。広告代理店の首都圏営業本部にてデザイナーとして勤務後、東北支店への転勤を契機に仙台市へ。2012年、SkyStars.LLCを設立。現在、仙台青葉学院短期大学にてデザイン領域の専任講師として、東北地域におけるデザイン研究と教育に取り組んでいる。

秋田県秋田市
ココラボラトリー 後藤 仁 氏

<https://cocolab.net/>



秋田県生まれ秋田育ち。ココラボラトリー2代目代表/デザイナー/アーティスト。ギャラリー運営を主軸に、作品制作、イベント企画、ダンス公演への出演など活動の幅は多岐に渡る。2015年～ココラボ代表。2018年～手づくり品市「ものまちさんぽ～」代表。2019年～「かみこあにプロジェクト」総合ディレクター。

山形県鶴岡市

羽越のデザイン企業組合 富樫 繁朋 氏

<https://umupj.com/>



山形県鶴岡市生まれ。大学卒業後東京で就職し9年前にUターン。地域活性化を掲げるNPO法人の立ち上げを行い、活動しながら5年前に羽越のデザイン企業組合を起業する。「自然と共に生きる暮らしを大切にし、文化が持つ壮大なチカラを伝える。」という経営理念を掲げ、文化に寄り添ったデザイン活動をしている。

福島県福島市

小池 晶子 氏

<https://www.instagram.com/tesagyo/>



福島県福島市生まれ。短大で空間デザインを学び大学に編入学、立体造形を学ぶ。映画の美術装飾に11年携わり数々の作品に参加。2014年福島市にUターン。屋号「手作業 小池晶子」として会場美術・木彫・デザインなど紙ものから空間まで幅広く活動。手を動かし、一つ一つの作業を積み重ねてできるものを生業とする。

② 取材概要

青森・岩手、秋田・山形、宮城・福島の3エリアに分けて、自治体等の地域活性化に取り組む主体との共創を促進するため、共創における障壁や秘訣などについて、以下のとおり取材を行った。

ア) 岩手のインタウンデザイナーの更なる掘り起こし取材

開催日時	2024 年 9 月 9 日（月）～9 月 10 日（火）
開催エリア	岩手県花巻市
行程	現地訪問 i：東和商店街（おもしろ研究所～佐々長さん～佐々寅文具店） 現地訪問 ii：東晴山公民館 現地訪問 iii：成和建設 現地訪問 iv：悠和会 銀河の里
取材参加者	・ 鈴木健一氏 ・ のはら 阿部拓也氏 ・ 澁谷デザイン事務所 澁谷和之氏 ・ ライター 佐藤春奈氏 ・ 東北経済産業局企画調査課 ・ 合同会社運動 柳澤龍（事務局）

i. 東和商店街



ii. 東晴山公民館



iii. 成和建設



iv. 悠和会 銀河の里



イ) 青森のインタウンデザイナーの更なる掘り起こし取材

開催日時	2024 年 9 月 11 日 (水)
開催エリア	青森県青森市・野辺地町・つがる市・黒石市
行程	現地訪問 i : 野辺地町歴史民俗資料館 現地訪問 ii : 神武食堂 現地訪問 iii : irodori 現地訪問 iv : 湊町カピリナ
取材参加者	・ 豊川茅氏 ・ アソビス 佐々木遊氏 ・ 澁谷デザイン事務所 澁谷和之氏 ・ ライター 佐藤春奈氏 ・ 東北経済産業局企画調査課 ・ 合同会社運動 柳澤龍 (事務局)

i . 野辺地町歴史民俗資料館



ii . 神武食堂



iii . Irodori



iv . 湊町カピリナ



ウ) 山形のインタウンデザイナーの更なる掘り起こし取材

開催日時	2024 年 10 月 22 日 (火)
開催エリア	山形県鶴岡市
行程	現地訪問 i : 古今 cocon 現地訪問 ii : 鶴岡市温海庁舎 現地訪問 iii : マリンパークねずがせき 現地訪問 iv : まちづくりスタジオ鶴岡 Dada 現地訪問 v : 関川しな織センター
取材参加者	・羽越のデザイン企業組合 富樫繁朋氏 ・吉野敏充デザイン事務所 吉野敏充氏 ・澁谷デザイン事務所 澁谷和之氏 ・ライター 佐藤春奈氏 ・東北経済産業局企画調査課 ・合同会社運動 柳澤龍 (事務局)

i . 古今 cocon



ii . 鶴岡市温海庁舎



iii. マリンパークねずがせき



iv. まちづくりスタジオ鶴岡 Dada



v. 関川しな織センター



エ) 秋田のインタウンデザイナーの更なる掘り起こし取材

開催日時	2024 年 10 月 23 日 (水)
開催エリア	秋田県秋田市・上小阿仁村
行程	現地訪問 i : 渡辺幸四郎邸 現地訪問 ii : 田村一氏の工房 現地訪問 iii : 旧かみこあに保育園
取材参加者	・ ココラボラトリー 後藤仁氏 ・ 澁谷デザイン事務所 澁谷和之氏 ・ ライター 佐藤春奈氏 ・ 東北経済産業局企画調査課 ・ 合同会社運動 柳澤龍 (事務局)

i . 渡辺幸四郎邸



ii . 田村一氏の工房



iii . 旧かみこあに保育園



オ) 宮城のインタウンデザイナーの更なる掘り起こし取材

開催日時	2024 年 12 月 12 日 (木)
開催エリア	宮城県仙台市
行程	現地訪問 i : せんだい 3.11 メモリアル交流館 現地訪問 ii : 亀兵商店 現地訪問 iii : TRUNK
取材参加者	・ 伊藤典博氏 ・ 合同会社 nekiwa 横塚明日美氏 ・ 澁谷デザイン事務所 澁谷和之氏 ・ ライター 佐藤春奈氏 ・ 東北経済産業局企画調査課 ・ 合同会社運動 柳澤龍 (事務局)

i . せんだい 3.11 メモリアル交流館



ii . 亀兵商店



iii . TRUNK



カ) 福島のインタウンデザイナーの更なる掘り起こし取材

開催日時	2024 年 12 月 13 日（金）～12 月 14 日（土）
開催エリア	福島県福島市
行程	現地訪問 i : 小西食堂 現地訪問 ii : 平澤屋旅館 現地訪問 iii : 中ノ沢温泉旅館案内所 現地訪問 iv : ニューヤブウチビル 現地訪問 v : あんざい果樹園
取材参加者	・ 小池晶子氏 ・ 高木デザイン事務所 高木市之助氏 ・ marutt 株式会社 西山里佳氏 ・ 澁谷デザイン事務所 澁谷和之氏 ・ ライター 佐藤春奈氏 ・ 東北経済産業局企画調査課 ・ 合同会社運動 柳澤龍（事務局）

i : 小西食堂



ii : 平澤屋旅館



iii : 中ノ沢温泉旅館案内所



iv : ニューヤブウチビル



v : あんざい果樹園



③ 取材結果

本事業で実施したインタウンデザイナーと自治体等の地域活性化に取り組む主体へのインタビューでは、インタウンデザイナーの地域への思い、取り組む姿勢、活動内容のヒアリングに加え、自治体等の地域活性化に取り組む主体と協働するにいたった経緯、協働内容、共創における障壁、共創を推進するための環境整備、共創を通して向上したデザインリテラシーについて把握することができた。

① 岩手調査：鈴木健一氏について

鈴木健一氏はデザインの考え方は誰しもがもてるものであることを伝える活動として、多様なジャンルのゲストを迎えたトークイベント『デザインのはなし』を開催している。デザインについての理解を求める活動をしつつ、岩手アートディレクターズクラブや県主催のデザイナーとのマッチング事業によって、デザインを取り入れる事業者とつながっている。地域一帯でのデザインリテラシー向上にむけた環境整備が重要である。

② 青森調査：豊川茅氏について

豊川茅氏は縄文遺跡に関心があり、縄文遺跡を素材とした作品の展示会を、青森市内の店舗や青森県立美術館にて開催した。その展示会を訪れた野辺地町教育委員会の職員が、町から出土した土偶のPR事業への協力を依頼し協働がはじまった。デザイナー自身が得意とする題材を持ち、自主的な告知活動が協働のきっかけになっている。

野辺地町教育委員会では、豊川茅氏との協働からはじまり、近隣市町村と連携した青森エリアとしての情報発信事業を、自治体を跨いだ予算を獲得して実施している。デザイナーとの協働をクライアントである自治体側が推進できたのは、縄文遺跡という1つの自治体ではなく広域的に扱っているテーマのため可能になった。

③ 山形調査：富樫繁朋氏について

富樫繁朋氏は地域で自然体験プログラムを提供するNPO法人で活動する中で、市職員が地域を案内したことがきっかけで、地域資源である「しな織」に出会い、市と大学機関が共同開発した化粧水の販売のための法人設立を担うことになる。デザイナーが、行政機関や研究機関など、多様なステークホルダーを巻き込む役割を持つことで、デザインの活用が広まる可能性が高まる。

④ 秋田調査：後藤仁氏について

後藤仁氏は秋田市のギャラリーの創設メンバーで、当初はギャラリーのポスターやフライヤーを制作するグラフィックデザイナーとして活動をはじめた。その後、ギャラリーの代表を引き継ぐ中で、近隣地域で開催されるクラフト市、出生地である村の芸術祭のディレクターも引き継いでいく。デザイナーという役割を拡張しつつ、ひとりひとりの創造性を上げるための取り組みを続けている。デザインを受注する側から、デザインを発注する側へ移行しつつ、デザインが扱う範囲を広げている。

⑤ 宮城調査：伊藤典博氏について

伊藤典博氏はデザイン会社を設立した後、商業ベースだけでデザインすることに物足りなさを感じるようになったことをきっかけに、大学の講師としてメディアデザイン論、広告デザイン演習を担当している。「教育という視点が加わると、生産者も含めた全員の関係性が深まること、文化が伝承されることで地域に何かしらの還元がされること、それが学生の教育となることが目的となる」というように、デザインリテラシーの向上において、教育の立場からデザインに取り組むと、自然と生徒や関係者のデザインの理解が深まる。デザイナーとの共創環境の整備において、大学機関内でのデザイナーによる教育は効果的である。

⑥ 福島調査：小池晶子氏について

小池晶子氏は映画や CM などの装飾部にいた経験から、空間を立ち上げる専門性を活かして、紙ものなどのビジュアルだけでなく、屋台や顔はめパネルなど多様な制作をしている。商品に関わるものだけでなく、体験自体をデザインするための制作物を作る中で、信頼関係を地域で築いている。制作物の幅を広げ、身近にあるものを制作するからこそ、自然と理解が広がるアプローチになっている。

(2) 公開討論会の開催

① 開催概要

東北で泥臭くデザインに向き合うデザイナー達が、日本海篇(青森、秋田、山形)として秋田に、太平洋篇(岩手、宮城、福島)として宮城・仙台に一堂に会し、東北のデザインを見つめ、研鑽し合う場を開催した。インタウンデザイナーが自治体等の地域活性化に取り組む主体との共創による取組内容や、共創における障壁やポイントなどを共有し、どのような情報の共有が有意義であるかなどについて、公開の場で議論し、参加者も含めて共鳴する要素を検証するとともに、新たな気づきや意識の変化について分析し、考察した。

(日本海篇、太平洋篇ともに2部構成とし、第1部はデザイナーを中心に、第2部では自治体など地域の活性化に取り組む主体も交えて実施)

○デザイン討論会フライヤー

日本海篇

青森・秋田・山形

デザイン討論会 参加無料
2025.1.26 [日]
@秋田市文化創造館 1F
秋田県秋田市千秋明通り 3-16

佐々木 遼 [青森]
豊川 茅 [青森]
斎谷和之 [秋田]
後藤 仁 [秋田]
吉野敏充 [山形]
富樫シゲトモ [山形]

東北、
デザインする
ということ。

主催：経済産業省東北経済産業局
共催：自治体デザイン事務局・自治体デザイン協議会
協力：東北スタンダード・ワークス(株式会社 東人)



TOHOKU DESIGN SIGN

Sato

太平洋篇

岩手・宮城・福島

デザイン討論会 参加無料
2025.2.22 [土]
@STUDIO080
宮城県仙台市宮城野区宮竹 3-1-6

阿部拓也 [岩手]
スズケンイチ [岩手]
横塚明日美 [宮城]
伊藤典博 [宮城]
高木市之助 [福島]
西山里佳 [福島]
小池晶子 [福島]

東北、
デザインする
ということ。

主催：経済産業省東北経済産業局
共催：自治体デザイン事務局・自治体デザイン協議会
協力：東北スタンダード・ワークス(株式会社 東人)

日本海篇

青森・秋田・山形

日時：2025.1.26 [日] [12:30-14:00] (受付:12:00-)

会場：秋田市文化創造館 1F 秋田県秋田市千秋明通り 3-16 | 018-803-5656

【参加費】 参加費は無料です。会場費は別途お申し込みください。

【お申し込み】 参加費は無料です。会場費は別途お申し込みください。

【お申し込み】 参加費は無料です。会場費は別途お申し込みください。

太平洋篇

岩手・宮城・福島

日時：2025.2.22 [土] [12:30-14:00] (受付:12:00-)

会場：STUDIO080 宮城県仙台市宮城野区宮竹 3-1-6 | 022-255-4100

【参加費】 参加費は無料です。会場費は別途お申し込みください。

【お申し込み】 参加費は無料です。会場費は別途お申し込みください。

【お申し込み】 参加費は無料です。会場費は別途お申し込みください。

i : デザイン討論会 日本海篇

イベント名	『東北デ、～東北で、デザインすること～』 公開デザイン討論会 日本海篇
開催日時	2025 年 1 月 26 日（土）12:30-16:00
会場	秋田市文化創造館 1F コミュニティホール
参加者数	140 名
取材参加者	【第 1 部】 ・ 豊川茅氏 （青森県青森市） ・ アソビス 代表 佐々木遊氏（青森県八戸市） ・ ココラボラトリー 後藤仁氏（秋田県秋田市） ・ 澁谷デザイン事務所 澁谷和之氏（秋田県美郷町） ・ 羽越のデザイン企業組合 富樫繁朋氏（山形県鶴岡市） ・ 吉野敏充デザイン事務所 吉野敏充氏（山形県新庄市） 【第 2 部】 ・ 山形県金山町職員 丹健一郎氏（山形県金山町） ・ 秋田県立近代美術館学生主事 北島珠美氏（秋田県横手市） <進行> ・ 澁谷デザイン事務所 澁谷和之氏（秋田県美郷町） ・ 合同会社運動 柳澤龍（事務局）

○当日の様子



ii : デザイン討論会太平洋篇

イベント名	『東北デ、～東北で、デザインすること～』 公開デザイン討論会 太平洋篇
開催日時	2025 年 2 月 22 日（日）12:30-16:00
会場	STUDIO 080 2F ホール
参加者数	120 名
取材参加者	【第 1 部】 ・ 鈴木健一氏（岩手県花巻市） ・ のはら 代表 阿部拓也氏（岩手県遠野市） ・ 仙台青葉学院短期大学専任講師 伊藤典博氏（宮城県仙台市） ・ 合同会社 nekiwa 横塚明日美氏（宮城県丸森町） ・ 手作業 小池晶子氏（福島県福島市） ・ 高木デザイン事務所 高木市之助氏（福島県いわき市） ・ marutt 株式会社 代表取締役 西山里佳氏（福島県南相馬市） 【第 2 部】 ・ 福島県いわき市職員 猪狩僚氏（福島県いわき市） ・ 空白実習室 管理人 佐藤太一氏（宮城県角田市） <進行> ・ 澁谷デザイン事務所 澁谷和之氏（秋田県美郷町） ・ 合同会社運動 柳澤龍（事務局）

○当日の様子



② 実証結果

日本海篇と太平洋篇の2回のデザイン討論会では、前半は県ごとのインタウンデザイナーの活動紹介を、後半では自治体等の地域活性化に取り組む主体とインタウンデザイナーの共創に焦点を当てて討論会を行った。登壇者数は日本海篇8人、太平洋篇9人となり、東北6県を横断したインタウンデザイナーの活動紹介からデザインへの理解を深め、インタウンデザイナーと地域活性化主体との共創事例と共創の進め方における知見を共有することができた。

・日本海篇を通して得られた知見

＜グッドプラクティスによる組織内でのデザイナーとの共創促進＞

インタウンデザイナーと自治体との協働事例では、山形県金山町職員の丹健一郎氏と、吉野敏充デザイン事務所の吉野敏充氏による活動紹介があった。2人の活動がはじまったとき、役場内でデザイナーと協働していたのは丹健一郎氏のみだった。活動が続く中で、デザイナーとの取り組み方を職員が身近に感じるようになり、今では10名程度の職員がそれぞれデザイナーと協働するようになった。デザイナーとの協働による丹健一郎氏の活動が事業実績を出したことで、組織内のデザインリテラシー向上促進につながり、結果的にデザイナーとの協働の横展開に至った事例である。行政という組織では、デザイナーとの協働によるグッドプラクティスを1つでも生み出すことが、デザイナーとの共創を効果的に進める要素と言えるのではないか。

・太平洋篇を通して得られた知見

＜多様な表現が可能な場所によるデザイナーとの出会い＞

日本海篇と比較して、太平洋篇のアンケート結果で、デザイナーと協働する上での課題で割合がもっとも高かったのが、「マッチングの仕組みがない」だった。そもそも地域にデザイナーが少なく、自治体によるデザイナーと事業者のマッチングイベントも企画されることはあるが、その機会は限られており、デザイナーと出会うことが難しい現状にある。太平洋篇に登壇したアートの展示や音楽イベントなどができるスペース「空白実習室」を運営する佐藤氏の事例紹介では、デザイナーとの出会いが自然とうまれている様子が伺えた。同じく登壇者の横塚明日美氏、小池晶子氏も訪れており、地域住民や自治体職員などと展示・企画を通して出会い、自治体主催の市民の学び場事業のデザインを発注され、農家がクライアントになるなどの話があった。

マッチングイベントにおいては、広義のデザインや戦略的なデザインについて共有しづらいという課題がある。お互いを学び合い、対話をつづけることで戦略的なデザインが可能になる。そのようなコミュニケーションは、顧客として関係性が定まっている場よりも、関係性が定まっていない空白実習室のような場の方が促進する可能性がある。登壇したデザイナーの多くが、マッチングイベント以外で顧客と出会っていた。インタウンデザイナーとの共創環境の整

備において、多様な表現が可能で顧客との関係性が定まっていない場の創出が重要だとわかった。

・アンケート結果からの課題整理

デザイン討論会では127人分のアンケート結果が集まった。回答への記載内容を踏まえて、インタウンデザイナーと地域活性化主体との協働における課題の整理をまとめる。

1. 共創における課題

①デザインの認知度の低さ

「地域の人々がデザイナーの存在や役割を十分に認識していない。」「デザイナーに何を依頼できるのかが分からず、相談のハードルが高い。」という回答があり、デザイナーの役割、関わり方がわからない、そもそも「デザインを活用する文化や風土が十分に育っていない。」などデザインを活用する土壌がないなどの要因が見受けられた。

②デザインへの理解不足

「デザインの力や効果について理解が浅く、価値を適切に評価できない。」「デザインを単なる「見た目の装飾」として捉える傾向があり、本質的な活用が進みにくい。」という回答から、デザインリテラシーの不足が考えられる。前提として、地域の経済規模が小さく、デザインに予算を割けない企業や団体が多く、予算ありきでの依頼になるためデザイナーへの関わり方が限定的になっていることが要因として上げられる。また、「“お金をかける価値があるのか”という疑問を持つ人が多い。」という回答もあり、デザインの効用、価値について理解されていない現状が見えてきた。

2. 共創における障壁

①デザイナーとの接点不足

デザイナーと地域の関係構築を進めていく必要がある中、デザイナーと地域住民の接点が不足している。デザインの理解を深めることが困難な状況では、目的をもってデザイナーと交流する機会は限られており、事業規模が小さい地域においてはデザインを発注する予算が少なく、共創する機会も限られている。

②意思決定プロセスの課題

デザインの重要性が理解されていないと、決定権を持つ人の承認を得るのが難しく、企業や自治体の上層部と現場の意識のギャップがあり、デザインの導入が進まないことが多いという意見があった。意思決定においてデザインの活用が検討されるためには、デザインの効果、価値を意思決定者に理解させる必要がある一方、デザインへの理解が不足している現状においてプロセスを変えるには現場が求めても困難が伴っている。

3. 共創におけるポイント

共創を促進するためには、デザインを地域課題解決の手段として位置付けることが重要と

考える。地域の課題を整理し、デザインが解決策の一つであることを明確にし、「デザインを活用することが、結果的に地域の経済や文化を活性化する」という視点を共有していく。説得力をもつためには、デザインの効果を可視化・検証する必要がある。デザイン導入による経済波及効果や地域活性化の成果を測定する、または成果を広く公表する。成果だけでなく、デザインのプロセスも共有したい。デザインが単なる「完成品」ではなく、課題発見から解決策の検討までのプロセスであることを伝えることで、デザインリテラシーの向上にもつながる。依頼者がプロセスを理解することで、適切なフィードバックが可能になり、共創がスムーズに進む要因になる。1つのグッドプラクティスが共創の第一歩であり、「デザインの力を知ってもらう」ことで多くの共創を促進していく。

もう1つは、デザイナーと地域住民・自治体との接点を増やすこと。多様な表現が可能な場を通して、デザイナーと地域住民が出会う機会になっている事例を把握できた。デザイナーが地域のイベントや教育機関と連携し、デザインを身近に感じてもらう機会や、学校教育の中でデザインを取り入れ、若い世代との交流を促進することも重要である。

4. 共創を促進する情報

デザイナーとの共創を促進する上で、不足している情報を検討する際、アンケート回答からは、「デザインの仕事そのものがぼんやりとしか知らなかったの、何からどうしたらよいのか分かりません。デザインの力でどれくらい変えられるのかな？ 伝わるのかな？ というところからイメージを共有出来たら嬉しいなと思いました。」「デザインは様々なシーンで活用出来るし、柔軟な導入が出来ると思うが、それゆえデザイナーを探す側もある程度リテラシーがあったほうが良さそう。地域のデザイナーは探しづらい。見つけにくい。実態が分かりにくい。」という意見があった。アンケートからは、デザイナーの仕事内容、多様な場面の事例、共創のはじめ方、期待できる効果などの情報が、デザイナーとの共創のために求められている。関係性を育む手段として、自治体・企業向けのデザインリテラシー向上プログラムの実施がある。デザインの基本的な考え方や活用方法を学ぶセミナーやワークショップや成功事例を共有し、デザインの価値を実感できる機会を作ることで、共創を後押しできる。

【『デザイン討論会 日本海篇 太平洋篇』参加者アンケート(n=127)(一部抜粋)】

■参加者の属性

アンケート回答者数 日本海編 83人 太平洋編 44人

Q1 ご所属を教えてください(1つに✓)

	日本海編	太平洋編	合計	
民間企業	29	10	39	30.7%
自治体	9	2	11	8.7%
金融機関	0	0	0	0.0%
産業支援機関	1	0	1	0.8%
教育・研究機関	4	3	7	5.5%
デザイナー	15	16	31	24.4%
学生	5	8	13	10.2%
その他	21	6	27	21.3%

■協働するのが効果的なテーマ

Q3. 「地域のデザイナー」と地域が協働するのが効果的と思うものを選んで

ください。(複数回答可)

	日本海編	太平洋編	合計	
地域や商品の情報発信	48	27	75	59.1%
商品開発やブランディングの企画・支援	49	24	73	57.5%
まちづくりやイベントの企画	49	23	72	56.7%
観光や産業の振興	47	17	64	50.4%
探求的学習などの教育	40	18	58	45.7%
郷土芸能や文化の保存・企画	48	22	70	55.1%
高齢者や障害者向けのサービス	20	12	32	25.2%
その他	10	4	14	11.0%

■デザイナーと協働する上での課題

Q4. 「地域のデザイナー」と協働する場合の課題と思うものを選んでください。(複数回答可)

	日本海編	太平洋編	合計	
地域にデザイナーが少ない	17	7	24	18.9%
デザイナーへ依頼する予算確保が困難	33	13	46	36.2%
マッチングの仕組みがない	28	23	51	40.2%
デザイン活用の重要性への理解	43	16	59	46.5%
仕事の頼み方がわからない	20	16	36	28.3%
どのくらいの費用がかかるか分からない	24	18	42	33.1%
コミュニケーションが難しそう	6	5	11	8.7%
その他	7	5	12	9.4%

3. 東北のインタウンデザイナーと地域の共創促進に向けたガイドブックの作成

2. (1)東北各地のインタウンデザイナーの発掘・活動の可視化及び、2. (2)公開討論会の実施を通じたナレッジシェアの内容を踏まえ、インタウンデザイナーの活動への解像度を高め、自治体等の地域活性化主体とインタウンデザイナーの共創促進を目的としたガイドブックを作成した。

○ 前書き・目次



○中開き



4. 「ナレッジシェア・ポート(知識移転の場)創出」実証調査から見てきたもの

本事業では、ナレッジシェア・ポート(知識移転の場)として『東北各地のインタウンデザイナーの発掘・活動の可視化』及び『公開討論会の開催』を実証的に創り出し、そこで共有された知見を「東北地域のインタウンデザイナーと自治体等の地域活性化に取り組む主体の共創促進に向けたガイドブック」としてまとめ、本事業を通して東北各地のインタウンデザイナーの掘り起こし、地域活性化主体とインタウンデザイナーの共創を促進するための知見の共有に取り組んできたことで、以下の示唆を得ることができた。

本事業の実証調査を通じて見えてきたことは、東北地域におけるインタウンデザイナーの役割の重要性と、その可能性の広がりである。地域に根ざしたデザイナーたちは、単なる視覚的デザインにとどまらず、地域の魅力を発掘し、再編集し、関係者をつなげることで新たな経済循環を生み出している。しかしながら、インタウンデザイナーの存在が十分に認知されておらず、自治体等の地域活性化に取り組む主体との協働機会が限られていることが課題として浮かび上がった。

本事業では、東北各地で活躍するインタウンデザイナーの発掘とその活動の可視化を行い、自治体等の地域活性化に取り組む主体との対話の場を創出することで、デザインリテラシーの向上を図った。これにより、デザインの活用が地域活性化に寄与することへの理解が深まり、具体的な協働の可能性が広がる契機となった。また、共創における障壁や成功要因が明らかになり、今後の施策検討において有益な知見が得られた。

今後の展望としては、インタウンデザイナーと自治体等の地域活性化に取り組む主体をつなぐ仕組みの継続的な構築が求められる。ナレッジシェア・ポートのような知見共有の場を定期的に設け、デザインを活用した地域課題解決の実例を蓄積・発信することで、デザイン人材のさらなる育成と活用を促進することが重要である。本事業を通して構築されたネットワークから、民間主導で活動を起こしていく機運が高まりつつある。この活動が、インタウンデザイナーとの共創事例の増加、東北全体のデザインリテラシーの向上につながり、それぞれの地域ならではのデザインによる課題解決につながるものと思われる。

令和6年度地域のデザインリテラシー向上に向けた、インタウンデザイナーと自治体等の地域活性化に取り組む主体をつなぐ「ナレッジシェア・ポート(知識移転の場)創出」実証事業
報告書

令和7年3月
経済産業省 東北経済産業局

(委託事業者: 合同会社運動)